

ダン展の関連企画であるアートフォーラム「戦争と美術 アンデパンダン展の原点をさぐる」を東京・六本木の国立新美術館で開催。会場は200人を超す参加者の熱気に包まれました。(清水博)

美術団体を統制
画材配給仕切る

はじめに戦争画の歴史と芸術家の責任をテーマに、荒木国臣・相山女学園大学講師が報告。戦争画の再評価がめだつ最近の日本の動向は、ドイツ、イギリス、アメリカと比較しても「驚くべき対照」だと述べ、多くの美術家が戦争画に「のめり込んでいった」歴史を振り返りました。

荒木氏は、日本の職業画家の従軍は、日本が中国を侵略した1931年の満州事変まではまれだったのに、37年の日中全面戦争を機に急増し、ピーク時には年2000人を超したと指摘。大政翼賛会結成(40年)

日本アンデパンダン展「戦争と美術」

戦争画にみる芸術家の責任

ての美術家を統合する美術報国会(43年)、美術家の資格認定と画材配給を仕切る美術及工芸統制協会が設立され(同年)、従軍して戦争画を描けば約2千円の謝礼(初任給数年分に相当)が支払われる一方、協

こと、新傾向の芸術は排除されたため、独特の画風で注目された露光も丙種とされ、わしにゃあ戦争画は描けん、どげにしたらええんかい」と嘆くほど追い詰

また芸術家たちの戦責任を、刑事的責任・政治責任・倫理的責任に分

「三人」「五人」
「アツツ島玉砕」

つづいて長田謙一
屋芸術大学教授が、藤田嗣治の「アツツ島玉砕」と、

長田氏は、銃剣を突き立てるなどの能動的動作は軒並み日本兵であり、米兵は一人を除き、ひん死か絶命状態で、「日本兵の円弧の内側に絶体絶命の米兵」という構図だと指摘。「絵では米軍が玉砕している。これは絵だからできることで、全滅した日本が絵の中では勝つ。死ぬことで勝つ」といえるのが玉砕だとすれば、ここには、その玉砕が見る人に経験可能なものとして提示されている」と述べました。

また美術家の間に、特別待遇の委嘱画家、プロ級画材が供給される甲種、教材程度

荒木氏は、日本の芸術家の抵抗が弱かった要因に家族・親族への「村八分」の恐れや、集団に流されるのを是とする日本の心理などを挙げつつ、「外圧に抗す

「アツツ島玉砕」
「三人」「五人」

つづいて長田謙一
屋芸術大学教授が、藤田嗣治の「アツツ島玉砕」と、

長田氏は、銃剣を突き立てるなどの能動的動作は軒並み日本兵であり、米兵は一人を除き、ひん死か絶命状態で、「日本兵の円弧の内側に絶体絶命の米兵」という構図だと指摘。「絵では米軍が玉砕している。これは絵だからできることで、全滅した日本が絵の中では勝つ。死ぬことで勝つ」といえるのが玉砕だとすれば、ここには、その玉砕が見る人に経験可能なものとして提示されている」と述べました。

そして、「同じ日に同じ美術館に展示された藤田と松本の2作品が、この時代に生まれた意味、それぞれがこの時代に受けた扱い、これらは、芸術作品とともに、それを享受する鑑賞者、媒介する人々やメディアをも含む、芸術をめぐるシステムの問題として、書きなおされる必要があるでしょう」と結びました。



戦争と美術を考えたアートフォーラム(こちら向き左から長田、荒木の各氏) 3月27日、国立新美術館

戦争と美術を考えたアートフォーラム(こちら向き左から長田、荒木の各氏) 3月27日、国立新美術館